

## 卒論の話

— 環境・情報編 —

編集部

前回は文系コースの卒論について取りあげ、そこから総科を垣間見た。そこで出てきた“問い”とは「迷う猶予が与えられているというのは、はたして良いことなのだろうか？」ということである。総科生はいつも選択を迫られる…。しかし、それが総科なのか？そもそも総科とは何なのか？総科生はどうしたらいいのか？わからない。それなら、今、総科生はどうしているのだろうか。今回は理系の卒論を見ることでそれを確認したい。

## 提出までのプロセス

ここでの取材対象は61年度生以上にとっての理系コース、つまり環境科学コースと情報行動科学コースである。しかし、取材していく中でこの2つは特別分けて論じる必要はないと考え、まとめて理系コースとして考えることにする。

まず研究室の選択。基本パターンとしては、3年次の1月に教官が受入れ可能数、研究内容を学生に伝達、それをもとにガイダンスが行われ、学生は希望の研究室をたずねて教官と相談する。これでおおよそ決まる。しかし、希望する学生数が研究室定員を超過することがある。これは文系の社会文化コース59年度生以降のゼミ選択の際にも出てきた問題だが、理系コースの場合、全面的に学生の調整に任せている気配だ。そもそも定員を決める理由というのは、①スペース、器具の限界②学生を散らばせたい、等の配慮によるものだ。

それから例外的なパターンとして、3年後期くらいから実質絞られてくる場合がある。正式には上に述べたプロセスを経るのだが、実験、ゼミ参加等を通じて早いうちから学生の方が一応の目星をつけるという。

研究室が決定したら早速特別研究にとりかからねばならない。このプロセスは大まかに2つに分けられよう。まず1つが「調査・実験系」。ここでは大体4月中旬に研究テーマを決定しなくてはならない。

(但し、生物・気象関係の一部では、研究対象の性質上それを一年周期で観察したいために、もっと早い時期からとりかかることが望まれる。)そして、テーマが決まるとその年の暮れあたりまで調査、実

験が行われ、データ収集に時間が費やされる。その中でも、5月中は器具の扱い方等を学ぶための練習実験が行われたり、7～8月まで実験等の基礎的な訓練が行われ、それ以降その教官が携わっている研究を一緒にやってやる、という場合がある。

もう1つが「理論系」。数学、物理系に多く、プロセスとしては、前期はゼミ形式で文献講読が行われ、後期ぐらいからテーマを決めて本格的な特別研究に入るというのである。

以降は調査・実験系も理論系も殆んど変わらない。年が明けて1月は論文文化の作業に追われ、1月31日提出。しかし、ここで終わりではない。2月後半に毎年卒論発表会があるが、理系の場合「提出」とは言っても実質“仮提出”で、この発表会までの間に手直しや付け加えの作業が行われる。この期間が最も忙しい人もいる。また、発表会が済んでも後輩等に残す研究データをとるために、卒業式の前日まで実験をやるところもある。

以上、プロセスについて述べたが、理系は学問の性質上か、手法・プロセスが多彩で一般化が仲々難しい。しかし、特徴として、指導面では特に実験系での研究の場合、実験はいつも研究室で行うから、教官はイヤという程顔を合わせる。しかし、そのために極めて密な指導、すなわち研究以外のことも含めた全人的な指導ができる、ということがある。その点は文系とやや異なる点だ。(但し、理論系はゼミ形式なので文系の場合に近い)また、提出後も発表会までかなり密な研究がつづくという点も文系とは違う。

## 理系にとっての卒論

卒論とはそもそも何であろう。理科系の教官は例えれば次のようにとらえる。「自然科学の研究とはどんなものかを自分の身をもって体得するもの」、「論理的手法のトレーニング」、「利益と離れたところで純粋にアカデミックな研究ができる殆んど唯一のチャンス」、「大学教育の集大成」、「研究とはそれに関して全ての責任を自分が負わねばならないもの、ということを知る機会」、「壁にぶつかること。テーマが実力より高いところにある」、「悩む場

である。こだわってほしい」などだ。これらは、「手法習得の機会」という認識と「自発的にやる場」という認識の二つに大きく分けられる。学生はどの程度意識しているのだろうか。特に後者を。

また、卒論の実態とはどんなものであろうか？基本的にやりたいテーマをもっている人は多いという。但し、内容の深さを他学部のとくらべたら総科は劣るであろうということはよく言われる。本当にそうかどうかはわからないが、「総科はそれでよい」と仰る先生もいる。また、例えば環境科学コースの場合、地理、地学系の講義を専門的にとっていた学生が、化学系の先生のところで卒論を書くということもあっただろう。総科の卒論が、それなりの成果を上げているとしたら、それは何のたまものなのだろうか？学際的教育か？それとも学生の気質、努力によるものか…？研究室全体の研究テーマがあって、学生はそれに沿って、つまりプロジェクト研究の一環として特別研究を行う、という場合があるが、かなり成果を上げているという……。

また、特別研究が学際的研究になっているかどうかだが、院以上のレベルでないとそれは無理だとも聞く。但し、幅広い知識は手法や考え方の上でプラスになっているという。

### 他との比較

文系は、興味の幅が広がりすぎて4年になっても仲々絞り込めないという悩みがある。おそらくこれは、総科生ゆえにもつ悩みだと思うが、理系はどうか？調査・実験系はその研究の性質上（データをとるという作業が必要——これに時間がかかる）、4月にテーマを決めてしまう場合が多い。

また、文系においては、3年間自分なりに学んできたことが直接卒論に反映しないという問題もあった。理系でも、専門以外の様々な知識は直接卒論に反映していない。ものの見方、考え方、自分のやっていることの意味、位置を知るのには役に立っているというが……。

では、他学部とくらべてどうなのか？理学部の一部の話だが、研究室で学生がやるのは特別研究onlyでなく、極端な話、特別研究など1ヶ月で済む程、その比重は軽かったりする。そもそも、入学してから、講義をとる段階で大体の自分の道行きは見えており、研究室、卒論テーマ、とその選択の幅は極めて小さいと聞く。しかし、総科は選択の幅が広く、機会も多い。特に環境科学コースなどは、4年にな

る時に大いに迷うという。1～3年と4年との学問的連続性は他学部の方が優越している。総科生は4年からいきなり専門性を指向することが求められる。ゆえに総科生は苦悩する。

### 総科だから……

とにかく、理系総科生の携わる特別研究について、大変大まかであるが次のことがわかった。

- ①「学問（研究）の性質上」という制約があらゆる所にかかる。
- ②特別研究に入ったら、研究室への帰属意識は文系の場合とくらべてかなり強いものになっているだろう。
- ③他学部との比較で、研究プロセス・研究自体に選択の余地がある。そして疑問として、
- ④多彩な物の見方、考え方ができる分、本当に総科の卒論はその内容で劣るのか？

前回の飛翔で「講義」について特集した。そこでも浮き彫りにされたのが、理科系という学問分野がもつ制約、すなわち、担い手の選択意志の入り込む余地のない部分であった。しかし、総科では「つねに選択を迫られる」これをプラスととらえるかマイナスととらえるかは自由であり、実際、様々なとらえ方が総科生でなされている。しかしここでは、迷ったり、選択したりする余地、つまり“自分”を大切にできる余地があるのではないか。さらにそれが大切にされた卒論が、はたして他学部に劣ると言えるのか。

ひょっとしたら悩み、苦しむ分だけ総科生は幸せかもしれない。

ある他学部の友人がこう言った。

「選択の余地のある総科は楽しかろうナァ」

（文責：吉田雄一郎）



## 特別研究論文題目紹介

### I 卒業論文

コース	氏名	論文題目名
地域文化	今井直人	ディベート研究——実践的な議論の構成について
	大塚敏之	「パリジーナ研究」
	佐伯智	ボブ・ディランと1960年代のアメリカ社会
	中村ゆかり	「ことばと自己」
	荒木一視	西条盆地における農業村落の構造と展開
	石原宏	「マイケル・ポランニーの暗黙知について」
	煤田浩子	グリム童話の女性像
	大園文彦	「近世在町の研究」—安芸国佐伯郡廿日市を中心に—
	大森昭二	坂口安吾論—説話物語の研究と分析—
	垣本雅子	サービス産業に見る日米貿易摩擦
	片山かおり	「芸術と表現」—表現論から具体論へ
	河村直子	C. B. ブラウン試論—アメリカン・ゴシックに18世紀の世界観をみる
	瀧山健一	英国民衆音楽の英国性—風土学的考察—
	酒村由美	造語法の研究—新聞広告用語を中心として—
	重岡由美	ドイツの大道歌《Bänkelsang》について
	庄山ゆかり	犬筑波集研究
	杉原恵美	芥川龍之介論—その死と芸術—
	高澤英昭	畑山博作品論—闘いの神話をめぐって
	立石温子	グロテスクの背景—中世末期の絵画を中心に—
	中釜知則	戦後アメリカ政治におけるケネディの意義
	鍋島正次郎	中央アンデスのインディオ社会における集団形成の原理としての <sup>デュアリズム</sup> 双分制
	野田啓三	アメリカ文化におけるニュー・シネマの衝撃
	早野慈子	アンデスのキリスト教—Shrineを通じた分析—
	平岡良子	フランクリンと自叙伝—彼は「かぎ煙草色をしたちっぽけな模範」か—
	福川暢浩	森有正における「経験」の構造
	藤井伸子	1920年代アメリカの価値観の変遷—禁酒法をめぐって—
	松岡尚子	ドイツ語における呼びかけの変遷—18世紀の市民劇を中心に—
	松田智佐	伊予灘における漁業と漁村の研究—双海町上灘、下灘の比較—
	三浦晃治	石見地方における中心地の研究
	向山敦子	マグリット研究
本嶋智章	「存在と時間」に於ける現存在分析	
森美穂	岐島連歌の研究—棚守房頭・元行時代の連歌活動—	
社会文化	福原正志	ブラジルのインフレーションに関する理論と現実
	岩田聖二	ソ連政治体制の—考察—1917年から1926年における一党制とノメンクラトゥーラ制の関係について—
	太田裕司	企業の研究開発部門の立地と地域経済
	大塚英一	広島市の住宅問題

	越智 賢司	瀬戸内臨海埋め立ての地域経済への影響
	川上 健	サービス経済化の進展に関する一考察
	玖島 鐘二	大正期・旧都市計画法成立とその法制に関する一考察
	古賀 昌晴	労働手段論としての装置論—日本における製塩技術の発達史をモデルとして—
	小西 高明	「土地政策としての固定資産税 — 宅地並み課税論争の再検討」
	近藤由紀代	「香港返還交渉の過程とその展望」
	坂本 猛	フィリピンにおける米軍基地の成立とその意義
	櫻井 幹士	被爆者調査に現れた〈こころ〉の問題についての一考察
	佐々木 秀樹	社会における言葉の役割に関する一考察
	真川 兼二	都市の廃棄物処理
	滝 直哉	国鉄の分割・民営化と四国の国鉄
	寺内 勝己	「北方領土問題に関する一考察 — 日ソ両国関係の特殊性」
	寺田 紀生	「NSC-68におけるアメリカの戦略」
	中山 真志	1973年以降の韓国造船業の発達について
	新原 誠一	南北問題の展開と UNCTAD の設立
	箸方 宗和	「SDIとABM制限条約」
	平岡 信吾	「シーレーン防衛に関する一考察」
	寶官 浩之	戦後日本の自動車工業における技術発達についての一考察——昭和30年代の部品生産を中心として—
	枚下 圭貴	「出産」に関する一考察—社会人類学的視点から—
	間瀬 尚美	異人像の成立
	美木 由里香	平和教育に関する若干の考察—平和教育における視聴覚教材のあり方について—
	南 英治	消費者金融の現状と課題
	山岡 健	「大衆の実像」
	吉岡 雅夫	韓国における日系電機メーカーの企業活動について
	渡辺 伸二郎	農産物流通の現状と課題
情報行動科学	山本 賢治	制御可能性がストレス反応に及ぼす効果についての検討—自己管理の効果について—
	橋野 大作	ヒト前骨髄性白血病細胞の分化誘導におけるコミットメントに関する研究
	赤川 雅美	軟体動物アフリカマイマイの心拍動に対する伝達候補物質の作用
	今泉 昌子	パーソナルコンピュータによる時間割作成の研究
	宇野 昌美	太陽虫の軸系微小管に関する研究—軸足の単離法とその微細構造—
	沖永 晴紀	パーソナルコンピュータのグラフィックデータ圧縮に関する研究
	梶原 誠司	電子ビームテストを考慮した論理回路のテストパターン生成法に関する研究
	坂田 桐子	転勤と従業員のモラルに関する調査研究
	佐々木かほり	タッチパネルからの入力データの補正
	佐々木 信子	高孤独者の社会的スキル訓練の研究
	隅谷 孝洋	統計学の研究
	高田 辰男	リレーショナルデータベースに関する研究
	武田 聖子	共在する他者の顔面表情が味覚に及ぼす効果に関する研究



	竹本 真由美 丹 浩伸 津田 敏彦 十時 一浩 外山 有 平仲 靖宏 堀 克彦 増田 利恵子 箕岡 真里 宮本 美郷 村川 忍 森 大邦 八木 久美子 矢口 靖司 柳川 美佐子 渡部 陽子	FMRFamide 類似合成ペプチドのイガイ平滑筋における活性 酵母ペルオキシリウム系遺伝子のひとつが例外的にイントロンをもつ可能性 胚細胞における細胞増殖調節機構の研究 一トリ胚強膜線維芽細胞が分泌する増殖抑制因子について 回避可能・不可能学習における脳内電気現象 認知的斉合性の成立過程に関する基礎的研究 送り手の身体的魅力と性格が態度変容に及ぼす効果についての実験的研究 太陽虫における膜電位のイオン機構 アフリカツメガエルにおける生殖腺の分化と発育 太陽虫の細胞周期に関する研究—核数と体積変化について— ラムダ計算について 脳波と皮膚電気反応の脱馴化と半球機能差に関する研究 行動に及ぼすウルトラディアンリズムの影響 軟寒天培養によるニワトリ胚膜線維芽細胞の分化とその決定因子について Musical-Performance Anxiety に対する認知的対処方略の効果の検討 アカニシ歯舌筋の収縮反応およびその反応に対する神経ペプチドの修飾作用 個人的対人ネットワークにおける Social Support の機能に関する調査的研究
環境科学	中田 尋樹 木内 秀隆 中山 信之 真鍋 徹 井上 智博 海堀 修 加藤 泰章 倉持 淳美 篠田 貴 正路 文徳 杉山 康晴 塚本 久雄 内藤 勝 中谷 健二 中村 克典 長塚 富雄 福本 龍義 眞弓 孝之 美濃 輪智朗 室重 昌史 山崎 裕実 山下 大輔 山西 豊 山脇 辰弥 涌嶋 智	有限要素法の等角写像への応用 深入山山焼き跡地の微生物相について Fe <sub>3</sub> Pt の秩序化過程の研究 アカマツ林地における植物の生活様式 三次盆地における都市気候の研究 水田における生物群集の解析—殺虫剤散布の影響について— CsCl 型希土類金属間化合物の磁性 後続雨水中の溶在物質（主に陰イオン）の濃度変化 山火跡地の塩類循環において再生植物が果たす役割 山林火災跡地の貧栄養細菌について ヒメカンアオイ節植物の化学成分の地理的変異に関する研究 光合成光化学系Ⅱ反応中心結合蛋白質の同定 Energy-Dependent Phase-Shift Analysis of N-N Scattering（核子—核子散乱のエネルギー依存の位相差分析） 有機P-n接合による有機太陽電池の高効率化 高速道路際の昆虫相—建設・供用をとまなう昆虫相の変容 光合成光化学系Ⅱ第一電子供与体同定の試み マツ枯れによるマツ分類群遺伝子給源への影響の地域差 巖島における露岩分布特性に関する研究 感潮河川における流動拡散の考察 非晶質物質の構造のモデル 林野火災の防災研究—火止り線について ワケギの休眠打破におけるアブジン酸およびインドール酢酸の消長 「可換環における R-sequence と Macaulay 環」 IUCN 警告の絶滅の危機に瀕している植物種の保全に関する研究—ツバキ属希少種の組織培養による大量増殖に関する基礎的研究 マングローブの成育条件

## Ⅱ 修士論文

研究科	氏名	論文題目名
地域研究	片山 祐子	悪について
	生谷 武寛	カッシーラー研究 — 言語における象徴形式の問題 —
	岡田 小波	Die Kriegführung des deutschen Militärs 1916-1918- In Zusammenhang mit der Parlamentarisierung Deutschlands. ドイツ国防軍 (1916-1918) の戦争指導— ドイツ議会との関連において —
	金 泰焘	『従然草』における無常観とその周辺
	橋本 学	国民党治下における民主的文化運動の研究——抗日戦争期の重慶での活動を中心として
	山田 央夫	フッサールにおける形相
	和気 千穂子	松尾芭蕉の人間観— 構造を中心にして —
	易 素玖	福沢諭吉の中国観
	ヴォーン・ウィルス	日本実存主義文学論— 椎名麟三を中心にして —
	小野 隆信	教育における疎外と人格発達— イギリスを基点に、能力・発達と平等の関係への接近のために —
	判田 哲也	知識学に於ける三つの根本命題
	美濃部 京子	イギリス昔話にみる他界観
山田 順二	エレクトロニクス産業の立地のメカニズムおよび地域経済へのインパクト	
環境科学	大黒 一哉	ヒト骨髄性白血病細胞における外来性遺伝子の発現
生物圏科学	赤木 俊哉	超流動ヘリウムのラマン・スペクトル構造の圧力依存
	赤山 稔	Ceをベースにした金属間化合物の物性研究
	石田 亨	計算機実験による一成分プラズマの表面の研究
	上田 英司	RCO <sub>2</sub> Ge <sub>2</sub> 化合物の物性研究
	宇野 宏	嫌悪事態の反復経験が不安反応に及ぼす効果 — 直接経験と間接経験の比較検討 —
	大河内 浩人	バイオフィードバックによる皮膚温制御に関する研究
	勝治 洋子	Feをベースにしたラーベス相水素化物の物性研究
	後藤 瑞恵	温度変動がマツノザイセンチュウの増殖に及ぼす影響
	櫻井 潤一	別所地区、川戸連火地区における地すべり調査と比較考察
	立石 貴浩	山林火災跡地の土壌微生物バイオマスの動態
	頭山 昌郁	山火跡地の環境及び生物相の回復過程
	吉田 道生	広島県帝釈台地北東部に分布する古生界石灰岩の層位学的研究
	石田 秀樹	Studies on Motile Mechanism of the Ciliate, Spirostomum 繊毛虫 Spirostomum の運動機構に関する研究
	伊津美 佳織	レーザー・フォトリシスによる光合成光化学反応中心Ⅱでの電子移動過程の解析
	神原 直樹	酵母ペルオキシソーム遺伝子とその発現に関する研究
	斎藤 仁志	神経ペプチドによる筋活動制御の機構の免疫組織化学的及び薬理学的研究
	寺田 博之	ヒドラに関する超微形態学的研究
	樋口 明弘	リボソーム系における P-450 17 $\alpha$ lyase とステロイド基質の相互作用
	望月 直子	ヒト骨髄性白血病細胞の分化誘導に伴う遺伝子発現
	望月 秀雄	モルモット副腎ミクロソームのベンゾピレン水酸化に關与するチトクロ-



		△P-450
	若林 和幸	アブジン酸による細胞伸長阻害時の細胞壁代謝
工 学	金藤 浩司	統計学の研究
	鈴木 信行	On logics without the structural rules (構造規則を持たない論理について)
	竹政 浩昭	グラフ理論を用いた文字認識に関する研究
	ムスタフィド	非線形ポアソン汎関数理論と対称統計量の極限定理
	李 竹渝	On kitagawa's method of Detecting Outliers by AIC Procedure(AIC 法を用いて外れ値を検出する北川の方法について)

昭和61年度卒業生の就職状況は別表のとおりである。円高不況による一部企業の求人減等不利な条件があったにもかかわらず、結果は先ず先ずの好成績であった。

製造業、電気メーカー、輸送機器の採用減に対し、伸びをみせたのはサービス業、特に金融、出版・広告、コンピューター・ソフトの領域である。食品、薬品等その他の分野は、例年とあまり変わらない。公務員は理科系で国家（I種）に合格した者もあり、国家・地方とも例年のごとくであるが、教員は大幅に減少した。教員減を憂うべきなのか、慶ぶべきなのかそれは神のみぞ知ると言っておこう。

それでは、今年就職にトライする4年生以下の諸君のために、思いつくままの注意事項を以下に列挙することにしよう。

1) 職種を早く決めよう。どの方向に進むのか、4年生になっても未だ決まっていないうちは遅過ぎる。未決定の人は、なるべく早く決断をしよう。両親や先輩とも相談し、高望みもせず、さりとて卑下もせず、自分の能力に適応した職種を選ぼう。

2) 情報を多角的にキャッチしよう。職種を決めるにも、会社を選定するにも、先ず情報の収集が大切である。大学側からの情報は、掲示板によって流される。4年生は、その時期になったら毎日、プロティの就職用掲示板を見て欲しい。進んで各コース就職委員の先生方や厚生補導係を訪ね相談したり、

会社に資料を請求したり、先輩・知人・友人を通じて多角的にインフォメーションを集めよう。

3) 慎重に誠実に果敢に会社訪問に挑戦しよう。豊かな情報に基づいて目標が決まれば、計画どおり企業を訪問しよう。今年も多分、企業訪問開始は8月20日と予測される。勝負は8月20日以降の2ないし3週間、ことに最初の1週間である。7ないし8割方は、この時期に決まるといっても過言ではない。

4) 公務員・教職・マスコミを希望する学生は、3年次ごろから特に計画的な学習をしよう。

5) 豊かな人間性をつちかう努力をしよう。どんな職業につくにしても一番大切なのは、その人の人間としての魅力である。社会は、きちんとしたマナーを身につけ、教養も人間味も豊かな人材を求めている。世の中には頭のよい人間は多い。しかし、本当に腹がすわり、花も実もある、リーダーとなるべき素養をそなえた人物は少ない。常により良きもの、より深きもの、より高きものを求めて、大学生活を通じての不断の人間性陶冶が、より良い就職先を貴君（女）にもたらすことであろう。

なお、本稿を草するに当たって、そのアイデアやデータ等、大内侃委員長はじめ委員各位、特に宮城勝彦氏の協力を得た。深く謝意を表したい。

(文責 陣崎 克博)

## 昭和61年度 卒業生進路状況

(62.3.20現在)

区分 \ コース	地域文化	社会文化	情報行動	環境科学	計
卒業予定者数	(18) 33	(4) 29	(13) 28	(1) 25	(36) 115
進学	3	0	(3) 9	(1) 11	(4) 23
公務員	(2) 4	8	0	2	(2) 14
教員	(2) 3	0	2	1	(2) 6
企業	(11) 19	(3) 20	(6) 13	8	(20) 60
自営	0	0	0	1	1
無職	(3) 4	(1) 1	(4) 4	2	(8) 11

( )は女子で内数



## 就 職 内 定 企 業 名

地域文化	社会文化	情報行動科学	環境科学
タカキペーカリー 新日鐵化学 住建産業 日本写真印刷 原色美術印刷社 フジ (2) 住友信託銀行 プレインセンター 福武書店 読売広告社 中国新聞社 (2) 広電観光 富士通システムエンジニアリング ソフトウェア・リサーチ・アソシエイツ 中国日本電気ソフトウェア ひろぎんシステムサービス 日本タイムシェア	鹿島建設 コスモ石油 広島プレス工業 三菱アルミニウム 富士通 和泉電気 リクルート・コンピュータ・プリント 大日本印刷 エームサービス 広島銀行 広島相互銀行 (3) 安田生命保険 協栄生命保険 福武書店 リクルート 広島ガス 日本タイムシェア 広島市農業協同組合 田村電気製作所	大京 タカキペーカリー チヤス乳業 東洋曹達工業 林原 リクルート・コンピュータ・プリント 十和 ホビージャパン 社会調査研究所 中国情報システムサービス 沖中国ソフトウェア 四国日本電気ソフトウェア 伊藤忠システム開発	東洋曹達工業 ミドリ十字 丸善石油化学 日本電気 (2) 巴川製紙所 関西日本電気ソフトウェア C S K

## 就 職 内 定 公 務 員 ・ 教 員 名

地域文化	社会文化	情報行動科学	環境科学
(公務員) 国税専門官 北条市 (上級) 広島市 (中級) 大村市 (上級) (教員) 滋賀県 (高・国) 徳島県 (高・国) 山口県 (中・英)	(公務員) 国家公務員 (Ⅱ種) 鳥取県 (上級) 岡山県 (上級) 愛媛県 (上級) ② 福岡県 (上級) 兵庫県 (上級) 広島市 (上級)	(教員) 広島県 (高・理) 広島市 (中・英)	(公務員) 国家公務員 (Ⅰ種・物理) 広島県 (上級・林業) (教員) 広島県 (高・数)

## 大 学 院 修 了 予 定 者 就 職 内 定 先 調

(企業) 松下電器産業 日立金属 ワイ・イー・データ 日本自動車研究所 シャー タカキペーカリー 花王 三森永乳業 住友製薬	四国日本電気 ソフトウェア (公務員) 広島県 (上級・林業)		
---	--	--	--

## 地域文化コース 片山 かおり

私の場合夢から現<sup>うつ</sup>に戻るモウロウとした中で、就職場所を見つけていった気がする。「御飯ですよ。」今まで外で遊んでいた子供がその声を聞いた時と会社訪問解禁日は似た光景である。その日が来れば皆いい子になってお家に帰る支度をする。大学はそれ程楽園ではないが少なくとも自由な果実は食べ放題だったから。

6月一初めての会社訪問で東京に行った。某大手住宅会社のリフォーム専門の系列会社の説明会であった。何を隠そう当初はインテリアコーディネーターに憧れて、その可能性について吟味していた時期が私にもあったのだ。とは言え一度しか行った事のない東京へまあよく一人で行ったねー。なんて周りから呆れ返られたが、私自身そこが本命であったと言うより、一度迷子になってみないと自宅生はシビアな物の考え方が出来ないからと分った様な分らない様な心境で会場へ行ったのだが、実際そこはリクルートスーツの大群がわんさかいて、窒息しそうな異様な熱気と白けた気分を味わっただけだった。それから3日間友人の家に寝泊まりして、昼はスーツ姿のまま映画館に行ったり、ブラブラ歩き回り、夜は友人と2人で夢みtainな事ばかり話して盛り上がったが、彼女はその夢を現実にして今ザルツブルグ大学にいる。

今思えばリクルート就職情報や会社案内の資料に囲まれあれこれ研究した時より、好きな映画を見ながらブラブラしていた時の方が結構将来について考えていた様である。私がなぜ最終的にタカキペーカーリーを選んで、今パレンティンセールでチョコレート売場を駆け回っているのか不思議に思うがごく自然な事でもある。他の4年生の友達にも各々の企業選択の基準があり4人集まれば4つの道がある訳だが、意外と自分の足元に気づかない場合が多い。案外近い所に探していた物がある事も経験しなければ分らないものである。就職活動を通して男と女の違いを生まれて初めて痛感したなんて書けば大げさかも知れないが女と男はやっぱり違う。やっぱり違うからどうしようー。でもまだ目を開けて見る夢を追っていきたいなあと思う今日この頃である。

## 環境科学コース 美濃輪智朗氏に聞く

どこに決まったか?……通産省工業技術院 公害資源研究所(筑波)です。

なぜそこに行こうと……もともと環境問題の方面の仕事がしたかったからで、初めからそこに行きたかったというわけではなく、企業も含め色々回っているうちにそこに行こうと決めました。

いつごろから考えたか……そういった方面に行こう、と考えたのは3年生の終わり頃でしたね。リクルート情報などで企業の方は目星をつけたけど、行くなら大きいところ、と決めていました。というのも、環境アセスメント等をやる場合大企業の方が制約が少なく、自由にできると思ったからです。

就職活動、準備での障害、困ったこと……「環境問題がやりたい」という基準で選んだため、就職活動は公務員と企業、両方やりました。でも、準備が必要だったのは主に公務員の方で、一般教養、専門、面接などの試験のための準備は、卒業研究の障害にならない程度にやりました。ただ、企業の方はメジャーなところばかり回ったのでムダ足が多く、また、何回も東京←→広島を行き来していたため、金、時間ともに不足しました。また、コネが全然なかったことでも苦労しましたね。だけど、大変勇気づけられたのは、独りで回っている時に総科卒の先輩が会ってくれて、メンまでおごってもらった時です。だからみなさん、卒業しても後輩が尋ねてきたらおごってあげましょう。

とかく総科生は大変だと言われるけど、僕は“総科生”ということだけで得したと思います。総科生はいろいろなことをやっている、とアピールすればむこうも評価してくれるんじゃないかな。

最も苦労したこと……最も苦労したのは情報不足という点でしたね。僕の場合、東京で就職活動をしたんだけど、生の情報では東京に住む人達にはかなわなかったですね。また、行き来を頻繁にやっていたので時間が不足しました。

後輩へ……後輩へのアドバイス(になるかな)としては、まず情報を集めること、特に総科卒の先輩等がいたら連絡をつけることでしょね。それと、できれば公務員か企業かに絞った方がいい。両方は大変です。まあ、仮にハンディがあったとしても、それを逆手にとるぐらいの意気込みがないとだめですよ。(聞き手、編集:吉田雄一郎)



# 総合科学部同窓会

編集部

今手元に、一冊の名簿がある。昭和59年3月発行、同窓会会員名簿第2号。この名簿が出された後、同窓会は目立った活動を行っていない。只今休止中といったところである。

「——会の開催にあたりましては、連休の初日でもあり、また広島を遠く離れて就職したものが多く、多数の出席が得られるだろうかとの心配もありましたが、遠くは東京方面からも多くの参加があり久しぶりの再会に、近況あるいは学生時代の思い出、また出席できなかった友人達の消息を語り合う、大変賑やかな会となりました。約2時間のパーティもあっという間に時間がたち、万歳三唱で終了した後は、それぞれのグループが二次会に流れて行ったようです。式部学部長（注・現岡山理科大）をはじめ多数の先生方、そして広高同窓会の佐藤会長、土井田常任理事も御祝いにおいで下さり、同窓会は和気藹々とした雰囲気なかでスタートいたしました。」

以上の文章は、中 洋一郎同窓会長（53年卒）に、飛翔No.19に寄せて頂いたものである。同窓会発足の準備は、昭和54年、当時の学活委員長であった今中教官（現法学部）の音頭とりで始まった。55年4月12日には卒業生7名、在学生9名、オブザーバーとしての教職員8名から成る第1回設立準備会が開かれ、8名の世話人の選出、規約の原案作成が行われた。その後の準備委員会で名簿の作成、予算の問題等が議論され、56年5月3日、広島国際ホテルでの発会式に至ったものである。

同窓会名簿には、4ページにわたる会則が掲載されている。第5条には、同窓会の行う事業として、(1)会員名簿を適時発行する。(2)毎年1回以上会報を発行する、(3)毎年1回以上、総会を開催する、とあるが、現在はどれも行われていない。そのあたりの事情を今井知之現会長（53年卒）に伺ったところ、まず学部の歴史が浅くて同窓生の人数も少ない中で、組織運営の方法が確立されていないことをあげられた。当初事務処理は事務官の協力を得て行われていたようであるが、担当事務官が異動してしまうとまた一からやり直しとなってしまう。さりとて卒業生が時間を割いて全てを行うわけにもいかない。今井会長が次にあげられた理由は、役員の忙しさだった。

広島に残っている人間は少ない上に、それぞれ仕事を持っている訳で、同窓会にさける時間には限界がある。例えば名簿作成についていえば、往復葉書による住所・就職先の確認の繰り返しであり、大変な時間と労力を必要とする。最後に、財政の問題がある。同窓会費は入会金2千円、年間会費千円で、卒業生には卒業式の日に入会案内と振込用紙が配付されることになっているが、徴収率はひどく悪いそうである。

このような状態で活動を再開する為には、広島に残っている人間、特に大学に残っている卒業生を中心に活動していくのが理想的だと今井会長は語っておられた。そして事務処理に関しては、専任として人を雇う考えもあるらしい。また、入会に何らかのメリットを付加することで会費を集めやすくする事も考えておられるようだ。

ともあれ会則にも実状と合わなくなってきている点（例えば大学院新設による入会資格の拡大）なども見られるので、一日も早い活動再開を願うと共に会そのものの存在意義も見直して欲しいものである。また、61年度卒業生にも、活動再開の一翼を担ってもらいたいものだと思う

（文責 田中 誠）





## 新任紹介

### 佐野 真樹



私は生まれが茨城で、御飯を食べる時に使うハシも、川の上にかかっているハシも、長いものの先端のハシも、みな同じように聞こえます。広島の名産のカキも秋の果物のカキも同じです。ところが

これらをちゃんと意味によって違うように発音するの方が大部分です。そういう人にとってはアクセントの違いが意味を区別するのに役立っているわけで、私のようなアクセントの区別をしない地方に生まれ育った者にとってはアクセントの違いは全く意味をなさないわけです。これはもちろんどちらの方がいいとかいった優劣の問題ではなく（ひがみじゃないゾ!）、後天的に獲得された「言語知識」の違いにすぎないのです。ところが後天的に獲得されたものとはどうしても考えられない「言語知識」も存在します。例えば日本人ならだれでも——どこに生まれ育とうがどんな方言をしゃべろうがどういいう「国語教育」を受けてこようがそれらに全く左右されず——次の文の意味が2通りあることを（無意識のうち）「知っ」ています：「この犬は右目だけをつむることができる」 エッと思う人はよく考えてみて下さい。この文は、①この犬は右目しかつむることができない、という意味と、②この犬は右目をつむって左目をあけておくことができる、という意味と2つあり、最初に問題の文を聞いたら①か②かのどちらかで理解し、いったん指摘されればもう一つの意味が必ず出てくるはずで、この事実は、だれに教わったわけでもない、つまり後天的に獲得されたとは考えられない、日本語を母国語とする人ならだれでも持っている「知識」です。このような事実がなぜ存在するのか、そんなことを研究するのが私の専門の「言語学」です。そんなことやっても仕方がない？ 確かにハラのたしにはなりません。しかしハラのたしになるからとか、何かの役に立つからとかいった理由で研究をすべきではありません。知的興味をかきたてられるという人間ならだれでも持っているはずの知識欲が研究に駆り立てる、そうあるべきです。そして大学とは、そういうことを学生、教官を問わずさせてくれるところです。

ついでながら私は昭和32年1月18日生まれ、今一番思っているのは、「一人暮らしはもうイヤだ！」

（外国語コース 英語 講師）

### 中村 裕英



総合科学部の外国語コースに講師として赴任してきました。以前は文学部の助手をしていましたので、引越につきもののあの本の一杯詰まったダンボール箱の山を見る必要がなかったのでほっとして

います。これまで引越は3回しましたが、その度ごとにダンボールの数が増え、それに比例して学問的良心の痛みが増してきたからです。というのは荷造りするごとに、買ったままで開いたこともない本や、買ったことさえ記憶にない本と対面するはめになるからです。だいたい、自分が本を読めるスピードと使える時間とを大まかに計算すればある一定限度の本の量は分かるにもかかわらず、それをかなり超えて買うということは、そこに書かれている知識よりは、目の前の本棚に本が増えること自体に喜びを感じていたということになります。この病気はだいたい大学院レベルの、アルバイトをして比較のお金の余裕があり、しかも遊ぶことを知らない学生の間で見られますが、それは図書館の書庫に入って、ここにある本はすべて自分の本だと思いつむことさえできれば癒されます。さらには、自分の血肉になる本の読み方を体験すればいいのですが、これは少し難しい治療法です。もちろんこの病気は独身時代のことであり、財布の紐が自由にならない今では病気になると思って無理です。私の専門は英文学で特にシェイクスピアですが、その英語の表現の豊かさと面白さをずっと楽しんできました。現在は、この「楽しむ」ことを本来の目的として持っているものに、「学」としての体系をほんの少しでも与えられればいいと思っていますが、グラマトロジーとかエクリチュールなどという訳の分からないような批評用語を使わなければそれができないのかと最近悩んでいるところです。この悩みが昂じてくると釣りや囲碁をしますが、悩みが昂じなくてもそれらを私がするとする人がいます。

（外国語コース 英語 講師）



## 広島大学総合科学部へ赴任して

ふじはら きたお  
藤原 祺多夫



昨年10月半ば東京大学より赴任して約4ヶ月が経ちましたが、少しずつ広島大学の様子がわかりはじめた今日この頃です。学科のない総合科学部というのは、広島大学が最初に試みた方式だそうです

が、多くの大学で、理・農・工・薬・教育などという縦割りの融通性の小さい学部組織のみから成り立っている方式は、確かに不便かつ新時代の自然科学に対処できる自由度に欠ける面があると思います。私の専門分野は化学特に分析化学を主体とする無機化学ですが、例えば分析化学という名前をもつ講座が、理・農・工・薬の各学部に入り、かつ互いに学問的情報交換がないというような実情は、非常に無駄の多い硬直した体制と言えるのではないかと思います。こうした点で総合科学部を見てみますと、他の分野の多くの先生方と接する機会があり、又研究組織がある程度自由に变化する余地をもつということは、大変新鮮に思われます。

さてなぜこのような事を書いたかと申しますと、ちょうど19世紀末がそうであったように、20世紀末を迎えて自然科学も又世紀末的混沌状態の時代に入っているような気がするからです。つまり化学で言うならば従来からある分析化学・無機化学・物理化学・有機化学・生物化学といった分野の色分けが次第に不鮮明になり、生命化学・材料化学・環境化学といった複合領域が次第に台頭してきているというのが現状だと思います。しかしそうした新しい分野が旧来からある学問体系を完全に塗り変えてしまうのかというと、やはり依然として従来からの化学も基礎として捨て去れない——特に大学教育の場においてそうであろうと思われます。つまり新旧の価値体系がせめぎ合い、やがて新しい体系の化学が生まれるのか、或いは化学が本質的な学問としての意義を失い単に応用分野として基礎科学の分野から消え去ってしまうのか、混沌とした状態が現状であると思います。この意味で総合科学部の将来は、自然科学の将来を方向づけるという大きな観点からも意義深く感じられます。19世紀末の混乱した物理学の中から量子力学が誕生したように、化学という学問分野に新しい息吹きが生まれるとしたら、総合科学部のようなところだと思ふ次第であります。

(環境科学コース 自然環境研究 助教授)

## “飛翔”

これは、読者のみなさんがつくる投稿ページです。コミュニケーションの場である筈の『飛翔』は、とかく一方通行。でもそれじゃいけない。できるだけ多くの方の思っていることなり、反応なりを誌面に反映させたい……。そう考えて今号から始めました。総科のこと、学問のこと、書評、エッセイ、……その他、何でも大歓迎です。詳しくは最寄りの編集委員にお気軽におたずね下さい。『飛翔』は身近なあなたのメディアです。

### 井戸掘文化

環境科学コース 二年 男子

大学というところは、井戸掘文化になりがちである。と、ある先生が本に書かれていたのを憶えている。学部、学科、専攻、専門などという井戸を掘りつづける。さらに学生も然り。何らかの専攻を選ぶと、その分野は深く掘り下げていくが、どうも他の分野には極めて閉鎖的である。麻雀・サークル等々個人的に、井戸を越えての交流はあるにしても、公的にはまったくの分離状態である。ビッグサイエンスの今日、学生レベルとはいえ、専攻を越えての公的交流は、大きな意味をなすのではないか。急進的に進む科学技術。物理のみの目ではあまりに相手はでかすぎる。だから今日“学際”的な立場での研究が要求され、現実には動きは始めている。

そんな風潮の中、総合研究の開拓と推進をねらう総合科学部の果たすべき役割は、大きいだろうし、学生の方も大きな期待と希望で胸ふくらむことだろう。しかし、2年間総科を過ごした私の感じるもの、それは“何やってんねんやろう、”これが本音である。私自身の未熟さもさることながら、まだまだ総科自体が、理想を満足しておらずいくつかの課題を抱えている証拠だろう。現に総科における教育に、疑問と戸惑いを感じる学生も少なくないし、学生自身“学際”という立場にピンときていない気運があって、とかく、理学部に対して引け目を感じていたりしている。それは深い井戸を掘ってる理学部生を見て、落ちつく井戸もなく、あちこち掘っている自分達の存在の不安さが、そうさせているのだろう。つまり、学生自身がまだまだ理想に追いつけていないのである。また、今の制度を使いこなせない点にも一つの課題がある。しかし、今の制度を見て、それが完全であるのかといえば、そうともいえない。いろんな講義は用意されているものの、学生としては体系的に学びにくいし、あまりに井戸が浅い。それに群・コースを越えた交流もない。井戸を越えた交流なしに、何が学際か。

私が思うに、個人にあまりに井戸をたくさん掘らせすぎではないのか。それでは水は出てこない。それなら、個人には深い井戸を掘らせるべきで、制度が井戸と井戸との間に横穴を作る。これが本来の総科ではないのか。今の制度で、学生個人では、総合研究を行うには井戸が浅すぎると思うのだ。そんな訳で、私が総科に望むもの…それは井戸を越えた公的な横穴作りである。とまあ、きばってみてもしかたないけどあと二年だけれどとにかくがんばります。



近頃の大学生はみんが

象を飼ってる  
elephant.

イザト:ken

### 本代

外国語コース 助教授 佐藤 正樹

この薄給から本代を捻出するのは並大抵のことではない。研究費も乏しい。広島からだけでなく、あちこちから請求書が来るが支払いは滞りがちである。にも拘らずこれに反して、書物に対する愛着と執着とは歳を経るにつれて昂じていき、停まることを知らない。どうしてゲーテ全集だけで十種類も揃える必要があるのか、グリムの辞書だけで七、八十万の出費なのに、そのうえいつ完結するとも知れない



その改訂版まで買い足す必要があるのか、などとは一言も口に出さない妻の忍耐にはただ脱帽あるのみである。

しかしこの慢性的な本代不足は今に始まったことではない。大学三年のときのことだ。当時、年に一、二度、学内で洋書セールがあって、その中心はドイツ書だった。広島大学では第二外国語が明らかに、信じがたいほど軽視されているが、そういう不見識はなかった。さてそのセールで、当時はまだ初版で十七巻までしか出ていなかったゲーテのペルリーン版を見つけた。独文科の研究室にあったこの版を愛用していた私は目が眩んだ。こういうものが個人で所有できるというあたりまえのことを、そのとき初めて知って全身が震えた。値を尋ねるとこれこれだと言う。東独版は安価だと言っても、とても手が出ない。ちょっと金策をしてくるからと言って、私は他学科の友人のところに行った。それまでにもたびたび用立ててもらっていた友人に私は窮状を訴え、今日のところは手付金だけでいいから借してくれと頼んだ。友人は快く貸してくれ、ついにゲーテを私は所有した。梅雨時の蒸し暑い小雨の日だったが、段ボール箱のゲーテ氏に上着を被せ、その友人に傘をさしてもらった。雨と汗と両手のしびれた感じが、この本の前に立つといつも蘇ってくる。

この友人にはその後も幾度となく本代を借り、幾度となく急場を凌ぐことができたのだった。しかし私の方がこの友人に金を用立てるなどした記憶はさらさない。——その友人はついに愛想をつかしたのであろうか。私自身を借金の形に取り、やがて私の忍耐強い妻となった。

## 研究室雑感—いちねんひとからげ—

地域文化コース(志望) 杉原 由香

総科というのは、実に妙な友人のできる場所である。(と思う)それは全体に占める“個性的なひと”の割合が多いのもともかく——単に類が友を呼んでしまったのかもしれないが——半地下の研究室の存在も大きいと思う。滅多に研究室に現れない、又は一度も足を踏み入れたことのないひともあるだろうが、居ついてしまっているひともあるわけで、当然の様に彼又は彼女等のかもしだす雰囲気、一応我々61の時代の気分なのである。

昼休みは昼食ラッシュ、試験やレポート提出の前はタコ部屋。講義時にはサボってる奴が昼寝してるし夕方遅くまで残っていると先輩方のお手伝いをさせられたり被験者にされたり。各種情報いり乱れ、ノートの貸し借り、利害関係、六月祭、十一月祭、何でもござれの研究室なのである。ロッカーがあるのみのところとは、ゆめゆめ思うことなかれ。

もしかして、そこでのあの日の阿呆な阿呆な阿呆な会話、私は覚えているかもしれない……何年後でも。

## 四十の手習い

情報行動科学コース 助教授 上領 達之

「四十の手習い」という。本当は凄い言葉なのだ。二十歳ぐらゐの時には「年寄りの冷や水」の類語ほどにしか考えていなかった。若気の至り、随分思いつがっていたものである。自分自身が不惑を過ぎて、



小学生の娘を出汁に親子囲碁教室なる企画に通ったことがある。娘の関心は帰路の寄り道や余得の方であって石には欲がないものだから、教えられた通りに並べてくる。それが自然にいい着手となるらしい。父親はといえば、つい年齢相応の恰好をつけたがる。「いい齢」をしていることや日頃垂れている講釈が盤上の一子にも値しないことなど勿論百も承知ではいるのだけれども心

がそのようには動かない。昔し齧った我流も災いで、歯った石を置く。無論悪手である。その心が先生に見透かされていることも判ってしまうから、いよいよ無心の境地からは離れて、上達ところではない。他人の目にはどう映ろうとも四十年生きてきた誇りは、誰にでもある。しかし習う立場に身を置く以上、その一切の誇り、一切の実績を棄てねばならない。時には遥かに年若い者に対しても自分を空しくして師と仰ぐ、その覚悟を「四十の手習い」というのだろう。

思えば四十に限ったことではない。何歳であれ、習うという営みには無心になる覚悟が必要である。若さに由来する心のしなやかさがそれを苦しめないだけのことだ。ところがそのしなやかさをもたぬ若者が居る。義務教育で詰め込んだ安直な知識や、受験科目になかったなどのつまらぬ過去にいつまでも拘り続ける、尾を棄てきれないカエルのような学生である。スポーツでも芸事でも、初心者には「無駄な力を抜け」と言われるのが一番辛い。優れた師匠は

「力を抜け」と言わずにそれをさせる。「無心になれ。拘りを棄てよ」も同じことだろう。初めて学問と向き合う若者の心に、そんな言葉を使わずに本当の学問を注ぎ込んでやりたいものだ。そして若者は、心のしなやかさを失わずにいてほしいものだ。

## 総科のコースについて

地域文化コース 二年 女子

今回は、コース改正についての特集号ということで、私も、総科のコースについて日頃考えていることを一言。

総合科学部という学部は、いわゆる学際教育の場であるとよく言われている。けれど、やはり文系は文系、理系は理系であって、それほど学際教育という言葉を意識したこともない。文学部や理学部に比べると、文系の学生にとっては理系が、理系の学生にとっては文系が、わりあい近いものを感じる学部であることは確かだと思う。けれど、現在の自分自身（地域文化コース）を考えてみると、理系の講義は時間割の中の一つも見られない。これは、文系の多くの学生に言えることだと思うのだが。

このようにして考えてみると、現在の4コースにおける状態も、それほど総合科学部という学部の意義を反映しているとは言えないのに、61年度からの5コース構成、62年度からの7コース構成というのは、もっと総科の意義を失くしてしまうのではないだろうか。このようにコースを増やすことが総科という学部の意義を高めることになるのだろうか。これを機会に、自分が総科生であること、総合科学部というものをもう一度見つめ直してみたいと思う、今日この頃である。

“ばこ”  
**箱**

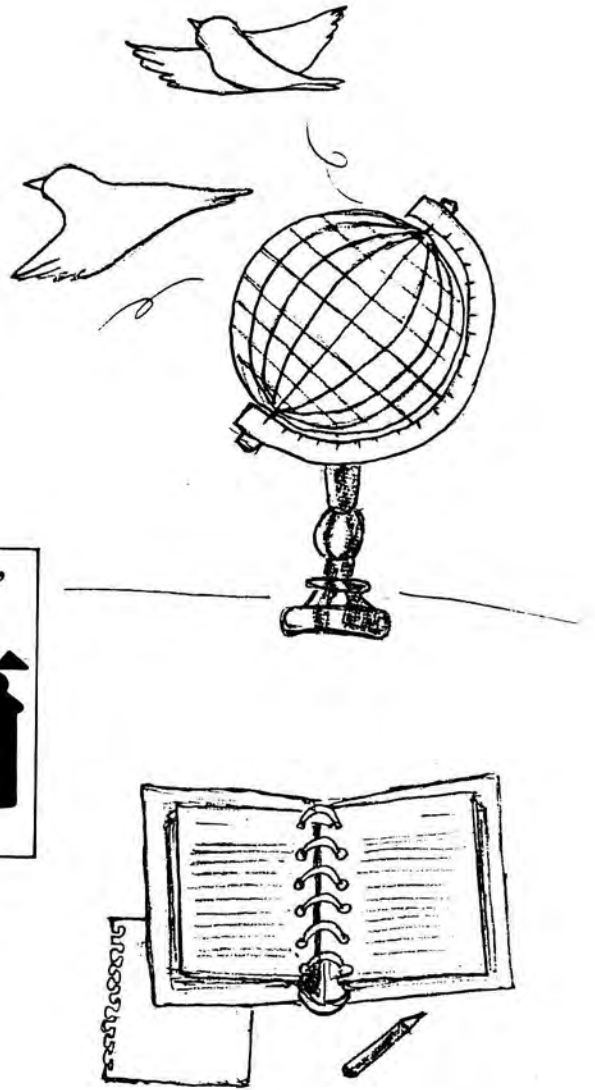


イラスト 内藤千恵美





シリーズ 街の総科

## 太 っ た 鳩

休日の平和公園を訪れた。もう肌寒い季節だったが、かなり多くの人がやって来ていた。ハトにえさをやる子供。一輪車乗りを楽しむ中年の人たち。カメラ片手の外国人観光客。広場で踊る若者たち。そして修学旅行の中高生たち。彼らはすべて平和公園で、自分なりの平和を満喫しているようだった。

四十二年前、原子爆弾を研究、開発した科学は当時の最先端であっただろう。原子エネルギー（核分裂エネルギー）は、現代物理学に新たな道を開いたアインシュタインの理論の検証の一つであり、核分裂のエネルギーが応用された最初の目的は原子爆弾であった。確かに、戦争中の国策の第一目的は、戦いに勝つことであり、兵器や戦略に最先端の科学を導入するのは当然であろう。しかし、科学者の良心、つまり「科学の目的は人類の平和な繁栄であってほしい。」という願いは、国策の前では無力なのだろうか。

逆に、科学者たちが、自ら研究した成果の有効性をどうしても実証したいという欲求から離れられないとすれば、詭弁を弄してでも、自らの研究成果の社会的正当性を主張するのではないか。例えば、「核兵器は現に戦争終結に貢献したのではないか。」という論理や、「戦争さえ、人口過剰の地球の人口削減に貢献しうるのではないか。」という論理さえ主張されかねないのではないか。現に戦争中の段階で、結果として戦争に利用され殺戮を推進するよう

な研究成果を発表しておいて、自らの責任でなく、悪用した側の責任だとするのは、あまりに認識不足であり、その点だけでも責任があると感じる。

今ここで責任が研究者側にあるのか、利用者側にあるのか論じたいわけではない。結果的に起こってしまったことの“悪”の面を認識することや、将来の結果として起こりうる“悪”の面を予想することの必要を主張したいわけである。自分だけの狭い視点からの研究には大きな危険を感じる。

平和公園は今日もある。おそらくこの平和が続く限り“ヒロシマ”のモニュメントとして残るだろう。一人でも多くの人がこの土地を訪れ、自分なりの平和を感じる必要があると思う。特に既に戦争体験のない世代の教育を受けている子供たちは、大人たちの押し着せの理念に染まる前に、自分なりの感覚で、自分なりに平和の価値を見つけていくことが必要なのではないか。次の世代の科学を支えていくのは彼らなのであり、新たな世代に戦争体験が受け継がれていくはずだから。

（文責 小笠原 弘明）

## 編 集 後 記

プロトコルと聞いてパソコン通信を思い浮かべた人は総合科学部へ入学資格ありといえよう。プロトコル（PROTOCOL）とは異なるコンピュータ間のデータ通信を行うための通信規約をいう。元来の意味は国家間の外交儀礼、つまりエチケットである。

大学には自由な気風のもとに様々な研究が進行している。又、異なる目的をもって様々な人が学び育っている。これらの新たなる高揚を期待する。そのためには異なる人々間のプロトコルが育ちはぐくまれる必要がある。飛翔も1つのプロトコルである。

（広報委員 水上孝一）

20世紀もいよいよおしつまってきた。世紀末という感じが新たに湧きおこる。過去10年のコンピュータなどの情報諸科学の進歩は、すさまじい。これは、これまでの様々な学問に多くの影響を与えるだろう。私は、しかし、進歩のない学問の典型である哲学をやっている。進歩があるのは、進歩のないものがあるからだ。

（広報委員 小川 侃）

新「無限への挑戦」が、コース案内を簡潔に、的確に表現しているのに対し、「特集：コース改組」は、No30の「特集、総科、新たなる発展」とともに、総科の未来像をインタビュー形式を交えて詳述しており、これらを併読することで、一般には必ずしもはっきりした像をもって理解されていたとは言えない我が総科が、鮮やかな実像となって浮かび上ってくるであろう。

（広報委員 本田和親）

広報誌『飛翔』の記事を書くのは、本や論文を書くのとちょっと違った難しさがあるように思います。総合科学部の大いなる発展に寄与するような記事がどんどん殖えていくことを期待しています。

（広報委員 山田 純）

「窓口案内」にも紹介してありましたが、**わが就職資料コーナー**には総合科学部独自の就職資料があります。しかし、利用者が少なくいつも居眠りをしています。せいぜい利用してやってください。

（厚生補導係 宮城勝彦）

求ム、飛翔委員！取材に行ってもよい、写真を提供してくれてもよい、お絵書きしてもよいし、お邪魔しに来るだけでもよいから。私の悲痛な叫びを聞いて。……編集後記でした。（内藤千恵美）

ここはどこ。わたしは、だあれ？何も、よーせんかった私は、何なんでしょ…。（中川 弘己）

アタマが欲しい。一個じゃ全然足りません。余ってる方ゆずって下さい。有益に使わせて頂きます。

（青山 幸樹）

なんのかわので、編集後記を書くのも4回目。次の号では、編集後記は全ての仕事が終了してから、ゆーっくり書きたいもんですね。みなさん。

（小笠原弘明）

締切ギリギリになるまで何もできない自分の性格が呪わしい！いつの間にか、社文の研究室に通う私でした……。

（新迫 明美）

春です。めでたく免許のとれた私、誰かNISSANのBe-1を買って下さい。HONDAのTodayでもいいよ〜。紺にしてね♡

（鈴木 美緒）

時折「実は憧れ続けているのだ」と思い出すものに「生態球」というものがある。最近なりたいと思っているものに「思い付きで地球をのみ込むアメーバ」というものがある。結局私は——。P.S. こないだ1つの選択をしました。

（藤本 貴子）

飛翔 — Never end — （田中 誠）

今回の飛翔で、ぼくは理系の者として手伝いをする、ということだったが、つい全面的に協力をしてしまった。それで、ぼくは次のように思った。「なぜ、今までぼくは飛翔に入らなかったのだろう。」

（平井 宏治）

UWFの前田<sup>アキラ</sup>日明がスランプだ。現状は、おまえの目指すプロフェッショナルレスリングとは裏腹に、演劇プロレスが未だ主流だ。さらにおまえは不器用ときている。しかし、おまえはそれでいい。とにかく必死にがんばれ、アキラ。いつか、いつかきっとお前の時代が来る。

（吉田雄一郎）